

アメリカの公立小学校におけるインターンシップ —イマージョン教育の現場から—

赤崎文音（東京女子大学現代教養学部国際社会学科国際関係専攻4年）

1. インターンシップ及び友人学園について

2019年8月24日（土）から9月21日（土）までと2020年2月8日（土）から3月6日（金）まで、アメリカのオレゴン州ユージーンにある友人学園（Yujin Gakuen Public Immersion School）でインターンシップをした。この2回のうち、8月・9月の期間は日本語教育グローバル人材奨励プログラムの助成を受けて参加した。私は東京女子大学で日本語教員養成課程を受講しているが、本インターンシッププログラムは東京女子大学の主催ではなく、養成課程の学生と友人学園との契約に基づいて参加することができる。イマージョン教育の現場においてどのような授業が行われているのかを、実際に教室に入り児童と直接関わりながら学び、さらには児童やホストファミリーと互いの文化について知識を深める機会とすることを目的としている。日本語教育や英語教育を学んでいる学生がインターン生として受け入れられ、東京女子大学以外には、夏のインターンシップに早稲田大学の学生が、また春季のインターンシップには早稲田大学と神戸大学の学生が参加した。

友人学園はアメリカで最初に設立されたイマージョン教育を行う公立の小学校である。ユージーンにイマージョン教育を行う学校を新設するにあたりとられたアンケートでは、設立された1988年当時日本がバブルで経済力が高かったことを背景に、日本語が選ばれた。イマージョン教育とは目標言語で算数や理科等の教科を学ぶというように、外国語環境に幼いころから子供を浸すものである。1988年に創立した当初、児童は25人であったが、現在は約300人が在籍している。「しんせつ、あんぜん、せきにん」を学校風土として掲げ、日本語教育だけではなく日本文化に親しむという点も意識しており、宿題をする習慣が身につく点が特徴である。



図1 友人学園の外観

友人学園では今年、The American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL)が出しているガイドライン (ACTFL, 2012) に沿って、各学年の目標を再考している最中である。5年生の卒業時には中級の下に到達することが目標であり、イマージョン教育やDual Language Programを行う他のユージーンの公立学校でも同様の目標を掲げている。ACTFLのガイドラインによると、中級の下指標は次のとおりである。

「話者は簡単で明瞭な交流場面において自分が言いたいことを表現し、限られた数の複雑ではないコミュニケーション・タスクを処理することができる。また限られた範囲の実用的な文章を書くことができ、聞き取りに関しては、基礎レベルの自分に関連した状況や対人交流の場面で、いくらかの情報を理解することができる。また読み手としては誤読は頻繁に起こすが、限られた範囲の個人的・社会的なニーズを扱った最も単純でつながりのある文章からある程度の情報を理解することができる。」 (ACTFL, 2012)

そもそもアメリカの小中学校の学年は日本とは異なり、地域ごとに規定されている。それは以下の3種類に分けられる。一つ目は幼稚園から

5年生までが小学生，6年生から8年生が中学生（ミドルスクール），9年生から12年生が高校生というものである。二つ目は，幼稚園から6年生までが小学生，7年生から9年生までが中学生，そして12年生までが高校生というものである。三つ目は，幼稚園から8年生が小学生，12年生までが高校生というものである(National Institute on Student Achievement, Curriculum, and Assessment Office of Educational Research and Improvement U.S. Department of Education, 1999:p.4)。友人学園は幼稚園から5年生まであり，各学年2クラスずつで，私が日本語のイメージのクラスを担当した4年生は約50人在籍している。

2. 日々の授業

8月27日から9月3日までは新学期の準備として，フラッシュカードや配布物の作成，教室の掲示物の補修などを行った。9月4日に新学期が始まってからは授業中は担任が授業をしている間の机間巡視や宿題およびテストの採点，日本語初学習者のひらがなの学習の補助，そして折り紙の授業を中心にを行い，児童が体育や図書の授業で教室にいない時間には事務作業を行った。さらに2-3月は，授業中に取り組んで不正解だった算数の問題の個別の解説や，太鼓や日本語で行う劇の練習の補助を行った。また，毎日15秒以内に一段ずつ暗唱する掛け算九九のテストを担当した。4年生のクラスには幼稚園の頃から日本語を学び始め5年目になる児童もいれば，今年度から初めて日本語を学ぶ児童も数名いた。初めて日本語を学ぶ児童はまずインターン生とともにひらがなを覚え，さらに他の教室で教室用語を学ぶなど個人の進度に合わせた対応が取られていた。例えば「鉛筆を出してください」という指示を聞き，その中から「鉛筆」という単語を児童が聞き取り，それが何を示しているか理解できるようになるといったことである。すると教室の中で使う言葉がわかるようになり，指示に対して周りの人が取る行動の様子を見て真似るだけでなく，教師の指示を聞いて自分自身で理解できるようになる。

3年生までは教師の言うことを児童が真似するということが大半の学習であった。5年生での卒業時には50パーセントの児童を「中級の下」に到達させることを目標としているので，4年生では3年生までに習った日本語を体の中に入れ英語と日本語をマッチさせ，教室の中で自分が言いたいことを自分の頭で考えて発言できるようになることを目標に掲げている。

そのために毎朝行う始まるの会では「配ります」，「集めます」など多くの動詞を使いながら，自分たちのアクションと言葉をマッチさせる。つまり低学年で重ねたインプットに説明が加えられ，それを理解し，実際に使うことができるようになるのが4年生の日本語の学習である。



図2 授業の様子

3. 個人に合わせた工夫と4か月間での変化

日本語で学ぶ学校であってもそれはアメリカの児童に合うものであるべきという考えのもと，友人学園では特に，教材や宿題の量を個人の能力に合わせて調節するという方法が取られている。

例えば宿題で「どようび（読み方）Saturday（意味）土曜日，土曜日，土曜日（書き）」が課される。これをその他に9語分練習する児童や，50音のひらがなとカタカナの練習をする児童に分けられている。毎週行うテストも全員同じ内容ではなく，それまで宿題で練習した内容が出題される。宿題が満点だった児童や，始まるの会で発言をした児童など努力が認められる際に「W.O.W. (We are Respectful. Our school is Safe. We are Responsible. の頭文字)」という賞（名刺



大の紙)を教師が渡し、それを児童が集めた枚数ごとに景品と交換することでモチベーションを高める。また週に一回各クラスから担任が一番頑張っていた児童を選び、全校放送で名前が呼ばれ、景品がもらえるなど、褒めてのばすことを重視するという手法をとっている。

夏期のインターンシップから2月の春季のインターンシップに参加するまでの約4か月間で、私が担当した4年生の児童には次のような変化が見られた。

新学期当初は、前述した始まりの会において、「ひらがなを読んでセリフを言っている」ようであったが、2月には「自分の言葉」として発言している様子であった。また9月には日本語初学習者としてひらがなの学習から始めた児童は、2月には教師からの指示に関して、文の中に知っている単語があれば聞き取ることができる段階に達していた。そのように成長が見られるなど、4年生の日本語の学習として掲げられる目標が達成されようとしていることが分かった。

4. インターンシップにおける気づき

毎日15秒以内に一段ずつ暗唱する掛け算九九のテストについて、合格するまでに時間がかかる児童が何人かいたため、フラッシュカードを使い練習をした。そもそもアメリカでは日本のように掛け算を「くいちがく」のように暗唱しない。また「はち(8)」が九九になると「はっば(8×8)」へと変化することも、つまりく一因のようだった。

多くの児童は幼稚園から友人学園に通っているため、担当した4年生のクラスの児童のほとんどは日本語を学んで5年目になるが、前述したように、中には日本語初学習者もいる。そのような教室の中で、担任は特に重要なことを伝えたいときや注意をするときのみ、日本語だけではなく英語も用いる。こちらにそのような意図がなかったとしても少し大きな声で注意すると怒鳴ったととらえられることがあるため、小さな

声で諭すように話しかけることが効果的であると日本語クラスの担任はアメリカ人の教師から教わったと言う。

教室の中での言語は日本語であったとしても、授業の方法は学習する側に合わせる必要があるということを理解することができた。

5. さいごに

本インターンシップは毎年秋(8月~9月)と春(2月~3月)の2回行われる。秋は13人、春は10人参加し、私を含め3人が秋春の2回参加した。平日に毎日特定のクラスに入り児童と信頼関係を築きながら、さらに他の学年を担当する同世代のインターン生と情報を共有した。

ほとんどの児童の第一言語は英語であるため、我々インターン生に対するとっさの質問などは、英語でされることが大半である。しかし私自身日本語クラスにいるため、英語でされた質問にも日本語で答え、理解できていないようであれば言い方を変えるなど、日本語にこだわって児童と接した。一方で英語教育について学んでいるインターンの学生は、英語でコミュニケーションをとることも多々あったようだ。もちろんそのほうが児童も言いたいことをスムーズに伝えられ、また理解もできるため、どの程度日本語や英語で接するべきかを見極めることが、非常に難しかった。私は日本語教育について学んでいるため、英語教育について学んでいる他大学の学生による児童へのそのような対応や接し方は非常に興味深いものだった。

帰国後も交流は継続しており、横のつながりによって学校全体でどのようなイマージョン教育が行われているかを知ることができる点が本インターンシップの最大の特徴である。この経験を通して、4か月間での変化や個人の能力に合わせて教材を調節するなど、机上では学ぶことのできない具体的な様子や工夫を知ることができた。

参考文献

- (1) 三輪充子(2006)「アメリカ合衆国におけるイマージョン教育-2言語併用教育の可能性を考える-」『国立教育政策研究所紀要』第135集, 189-201



—世界の日本語教育—

- (2) 読売新聞ヨミダス『日本語イマージョン教育の現場』
<<https://database.yomiuri.co.jp/about/rekishikan/casestudy/report10/#repo10eng>> (2020年5月11日)
- (3) American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL). (2012). *ACTFL PROFICIENCY GUIDELINES 2012, Japanese*. <<https://www.actfl.org/publications/guidelines-and-manuals/actfl-proficiency-guidelines-2012/japanese>> (2020年6月6日)
- (4) Hofer, B. (1999). Rationale for the Study. In National Institute on Student Achievement, Curriculum, and Assessment, Office of Educational Research and Improvement, U.S. Department of Education (Eds.), *The Educational System in the United States: Case Study Findings* (pp. 1-13). Washington, DC: U.S. Department of Education.
<<https://www2.ed.gov/PDFDocs/UScasestudy.pdf>> (2020年5月11日)